

オークニイ島のベイキー蔵書

Library of Robert Baikie of Tankerness

水 田 洋
MIZUTA Hiroshi

1

オークニイ諸島はスコットランド本土の東北にあり、かつてはイギリス海軍の根拠地のひとつであったスカパ・フロウは、この本島（メインランド）の湾である。本島の中心都市カークウォールの博物館に、近郊タンカーネスのレアード（地主）の蔵書があって、それが主として18世紀後半から19世紀初頭のものなので、スコットランド啓蒙思想の地方への普及の指標としてみる事ができる。

この蔵書を主として収集したのは、Robert Baikie of Tankerness (?-1817)で、かれは、16世紀前半までさかのぼられるこの旧家がタンカーネスのベイキーという称号をゆるされたとき(1630)から、7代目にあたる⁽¹⁾。当時の地主たちは、イングランドの貴族たちがロンドンと領地のあいだを往復したように、カークウォールにも住宅をもって、ささやかながら都会生活をたのしんでいたようで、この別邸は同時に商業活動の拠点でもあったらしい。蔵書はこの別邸におかれていたのだが、1957年に、12代のロバート・ベイキーがローデシア（現ザンビアとジンバブエ）に移住するにあたって、蔵書をふくめて邸宅そのものを放棄した。そのご約10年間は、邸宅も蔵書も荒廢にゆだねられていたが、市が邸宅を修理して、1968年に博物館を開設する過程で、蔵書にも修復の手がくわえられることになった。そのときの蔵書の状態は相当ひどいものであったらしく、ストーヴのそばにおいて乾燥させたという話がのこっている⁽²⁾。

さらに20年あまりたって、ようやく1989年に一応の蔵書目録ができあがり⁽³⁾、蔵書そのものは博物館の戸棚におさめられて、利用できるようになった。目録作成者のキャスリン・A・アームストロングは、注(2)にあげた *Library Review* に内容を紹介している。しかし、いま「一応の」と書いたとおり、この目録はとうてい fully catalogued などといえるような水準ではないし、アームストロングの内容分析も、おそまつである。文化の孤島で十分な書誌的ツールもなく作成されたのだろうから、無理もないのだが、こまったことにはちがいない。翻訳書の大部分が著者でなく訳者名で出ているのも、混乱をひきおこす。アームストロングもみとめていように、クロス・レファランスができていないから、たとえば、マケンジーの Julia de Roubigné は、匿名のままだし、モンボドの『言語起源論』は、Of でならべられている。内容分析についていえば、アームストロングの視野にはスコットランド啓蒙がまったくはいていないから、18世紀以後に孤島の地主がどうしてこのような蔵書をつくりあげたかが理解（推定さえ）できないのである。

アームストロングは、ベイキー蔵書を487点としているが、あとから発見されて彼女自身が見ていない附録をいれると528点で、487という数字は、タイトル数（同一書のいくつかの版があっても1とかぞえる）か、7代ロバート・ベイキー死後の出版をのぞくか（次男同名ロバートの医学書ものぞくべきだろう）した結果としか考えられない。彼女はこの487のうち、詩集

が115 だというのが、これは面倒だから承認しておいて、そのなかには、ヒュームがすすめたブラックロックやスミスが序文を書いたハミルトンの詩集もある（あとの版で）ことを指摘するにとどめたい。分析のねらいは、まえにのべたようにスコットランド啓蒙思想（および大陸の対応思想）の普及を検証することにあるからだ。

2

スコットランド啓蒙思想のなかの長老級、すなわち、ハチスン、ケイムズ、モンボドについてみると、ハチスンの『情念と愛情』、ケイムズの『批評要論』と『人類史』、モンボドの『言語起源論』があり、ついでヒュームの『イギリス史』の三つの版（1792年版は7巻だけ）および『評論集』と、スミスの『国富論』がある。ファーガスンは『市民社会史』ではなく『ローマ共和国史』で代表され、ロバートソンは、『カール5世史』が2セット、『アメリカ史』と『古代ギリシア史』である。さらにスメリーの『自然史の哲学』、G.ステュアートの『スコットランド史』、キャンベルの『修辞学』、ボズウェルの『コルシカ』、マケンジーの小説3篇に、スモレットが『イギリス史続編』や小説などをあわせて6点というように、スコットランド啓蒙思想を網羅したとはいかないまでも、孤島の地主のコレクションとしては、かなりのものである。

シンクレアの『スタティスティカル・アカウント』（統計的説明と訳してしまつては内容にそぐわない）があるのはむしろ当然で、かれをリーダーのひとりとする18世紀後半スコットランドの農業改良熱は、エディンバラからこの孤島に波及し、ベイキーらの地主もその波にまきこまれたのだからである。ただし、エディンバラの理論は、島の実情を無視していたので、効果はなかったが。

ベルのアジア旅行記やムーアのイタリア、フランス旅行記など、日本ではあまり知られていないスミス周辺の人物⁽⁴⁾の著書も、あげておこう。ほんとうは、ほかにもまだ、うずもれている本があるのかも知れず、この種の個人蔵書分析のおもしろさは、そういう一見わけのわからない本にぶつかることにある。これはアダム・スミス蔵書目録をつくっていく過程で何回も経験したことであり、かつて内田義彦に「君はわけのわからない本を見るとおもしろくなるんだろう」といわれたのにも照応する。とはいっても、こうしたおもしろさに出あうには、現物のある島との距離がありすぎる。

もともにもどってタイトルを読み続けると、イングランドでは、啓蒙の先駆者としてロックとシャーフツベリのほか、ジョンソン、プリーストリ、バークといったところである。ただし、プリーストリは電気についての本しかなく、バークはフランス革命論とポートルランドへの手紙である。ペインの著作そのものはないが、著者不明（表紙紛失のため）の伝記とふたつの反論がある。意外だったのは、ゴードンの『独立ウィッグ』やトマス・ハーディの『愛国者』のような、急進派の著作が少数ながらふくまれていたことである。

大陸では、ベイル、モンテスキュー、ヴォルテール、デイドロ、ダランベール、ルソーがあつて（大部分は翻訳だが）、とくにルソーは『人間不平等起源論』の1759年版である。ドイツからはシラーの『フィエスコ』と『ドン・カルロス』が翻訳でふくまれている。

以上のように見てくると、結局、ロバート・ベイキーとはなにものだったのかという、蔵書を戸棚のなかに発見したときの疑問にもどらざるをえない。ところが、アームストロングも、そのほかの地方史家も、ほぼお手あげなのである。1785年にメアリ・バルフォアと結婚し、1817年に死んだということのほかには、地方政治の有力者であり、1780年には国会議員になり（当選無効説と落選説がある）、慈善事業に巨額（地方としては）の寄附をしたくらいしか、わかっていない。

しかしまったく無教養のいなか地主の蔵書にしては、できすぎている。7人の子どものうち、次男の同名ロバートは、医師としてカルカットとエディンバラで活動したというから、エディンバラの医学部出身であろう。長男のジェームズについては、1800年にアバディーンのマーシャル・カレッジに入学した記録がある。そこで父親についても、学歴をたどりたくなるのだが、手がかりがない。妻の実家であるバルフォア家は、ベイキー家と同格の地主であるが、ウィリアム・バルフォア（1719-1786）は、3人の息子をアバディーン大学におくっている⁽⁵⁾。ウィリアムの年令をみると、ロバート・ベイキーの父親ぐらいの世代である。だから、両家はならんで息子に大学教育をうけさせたと考えたくなるのだ。ロバートの蔵書のなかにビーティーがはいっていないところを見ると、すくなくともアバディーンにはきていないと考えられるが、スコットランドにはほかに三つの大学がある。たとえば、サー・ジェームズ・ステュアートの甥（妹の子）にあたるアースキン兄弟は、長男のパハン伯（David Steuart Erskine, 1742-1829）がグラーズゴウ、「貧民の友」とよばれた次男のヘンリ（1746-1817）はグラーズゴウとエディンバラ、トマス・ペインの弁護で有名な三男のトマス（1750-1823）はセント・アンドルウズの各大学でまなんだ。ステュアートの孫が三人ともラディカルだというのも意外でおもしろいが、ロバート・ベイキーも、意外なところで啓蒙の知的雰囲気を呼吸したのかもしれない。

ここまでオークニイで書いて、アバディーンに帰ってきた。アバディーン大学では、長男のジェームズが1800年に入学したことがわかったが、父については記録がない。そこでエディンバラ大学でしらべたところ、ロバート・ベイキーが1770年に入学して、ファーガソンの道徳哲学とブレアの修辞学・文体論の講義を受講したことがわかった。当時の大学入学年令は14才だから、ロバートは1756年ごろの生まれだということになる。したがって、1785年に29才で結婚し、翌年生まれの子が1800年に14才でアバディーン大学に入学したとすれば、全部つじつまがあうのだ。意外でもなんでもない。

わかってみればかんたんなこと、というよりもこれは、郷土史家の視野のせまさの例で、あまりめずらしいことではない。とにかく以上のようにロバート・ベイキーの略歴がわかっていると、まさしくかれはエディンバラで、スコットランド啓蒙思想の空気をすって成長したことがあきらかになる。『国富論』（1776）はまだ出版されず、ブレアの『修辞学講義』（1783）にはまだ距離があるが、ファーガソンの『市民社会史論』（1767）と『道徳哲学要綱』（1769）は出版されていた。スミスが『国富論』の草稿をもってロンドンにむかうとき、エディンバラでヒュームを著作にかんする遺言執行人に指名するのは、1773年4月であるから、ベイキーはまだエディ

ンバラにいたかもしれない。もちろん、そのときベイキーがかれらにあったとは考えられないし、スミスがエディンバラに居をうつした1778年には、ベイキーはおそらくオークニイに帰っていただろう。しかし、スコットランド啓蒙思想へのかれの関心が消滅していなかったことは、ファーガソンの『ローマ共和国史』(1783)、ベルの『アジア旅行記』(1788)、ムーアの旅行記と小説5点(1779-1800)というように、帰郷後の出版物がかなり見られることによって立証される。スミスの『国富論』も第3版(1784)である。

まえにもふれたように、アームストロングのカタログからほりおこすべきものは、まだすくなく残っているのだが、そのためにはこのカタログをすべて再構成しなければならない。たとえば、いまあげたムーアにしても、『エドワード』(1796)と『モーダント』(1800)は、アームストロングによって匿名のまま収録されているのだ。

もうひとつ、おもしろいことは、このベイキー蔵書とアダム・スミス蔵書が内容的にかなりかさなっていることで、ベル、ムーア、マケンジーなどは、スミス蔵書にはあって当然ながら、それがベイキーにとっても当然(離島でも入手したいとおもい、入手できるほどに)であったのは、なぜだろうか。重複はかならずしもスミスの身辺の人びとの著書にかざられていない⁶⁾。

注

- (1) Hugh Marwick, *The Baikies of Tankerness, Orkney Miscellany*, vol.4, 1957, pp.27-47.
- (2) Katherine A. Armstrong, *The Baikie Library at Tankerness House Museum, Kirkwall, Orkney, Library Review*, vol.40, no 1. 1991, p.37.
- (3) Katherine A. Armstrong, *The Baikie Library, Tankerness House Museum Kirkwall Orkney. A catalogue*. 1990, 84pp.
- (4) John Bell (1691-1780) はスコットランド生まれだが、ロシアの外交官としてアジア各地に旅行した。旅行記はグラーズゴウのファウルズ兄弟によって出版され、スミスも予約者のひとりであった。John Moore (1729-1802) はグラーズゴウ大学にまなんだ開業医で、ヨーロッパ旅行記(フランス、スイス、ドイツ、イタリア)によって文名を確立した(死後、2巻の抜粋本が出た)。ロンドンで開業し、そこで死んだので、スミスとの直接の関係はないが、スミス蔵書のなかには旅行記が2点ふくまれている。ベイキー蔵書のなかのムーアの著書は、つぎのとおりで、このうち、はじめの2点がスミスの蔵書のなかにもある。

John Moore, *A view of society and manners in France, Switzerland, and Germany: with anecdotes relating to some eminent characters*. The second edition, corrected. London, W. Strahan and T. Cadell, 1779.

John Moore, *A view of society and manners in Italy: with anecdotes relating to some eminent characters*. The second edition. London, W. Strahan and T. Cadell, 1781.

John Moore, *A journal during a residence in France, from the beginning of August, to the middle of December, 1792. To which is added, an account of the most remarkable events that happened at Paris from that time to the death of the late king of France*. London, G. G. J. and J. Robinson, 1793.

[John Moore], *Edward. Various views of human nature, taken from life and manners, chiefly in England*. By the author of *Zeluco*. London, A. Strahan, and T. Cadell jun. and W. Davies, 1796.

[John Moore], *Mordaunt. Sketches of life, characters, and manners, in various countries; including the memoirs of a French lady of quality.* By the author of *Zeluco & Edward*. London, G. G. and J. Robinson, 1800.

(5) R. P. Fereday, *The Orkney Balfours 1747-99*. Oxford, 1990, p.44. この本には、ロバート・ベイキーもしばしば登場する。

(6) 両方にありながら理由がはっきりしない例として、ウィリアム・ヘイリー (W. Hayley, 1745-1820) の著書をあげておこう。クーバー、ブレイク、サウジーの友人でもあったこの詩人は、イートンからケンブリジを出たイングランド人で、スコットランドとの関係は、1767年に旅行し、詩をつくったことしか考えられない。ロバート・ベイキーは、1770年入学だから、この年にはまだオークニイにいただろうが、スミスは、前年の11月にフランスから帰って、この年の6月には故郷で『国富論』にとりかかっているの、5月にはエディンバラを通過したはずである。ふたりの旅行者がエディンバラで出あったかどうかについて、空想の領域をこえることは困難とはいえ、ヒュームやファーガソンのようなスミスの親友による媒介を考慮にいれると、想定はいくらか現実味をおびてくる。ただし、かりにスミスについてそういう想定がなりたつとしても、ベイキーについては説明のしようがない。

ベイキー蔵書のなかのヘイリーの著書はつぎのとおりであり、スミス蔵書には、最後の『三幕劇』を除いて、すべてはいっている。

[William Hayley], *Epistle to a friend, on the death of John Thornton, esq.* By the author of "An epistle to an eminent painter." The second edition, corrected. London, J. Dodsley, 1780.

William Hayley, *An essay on history; in three epistles to Edward Gibbon, Esq. With notes.* The second edition. London, J. Dodsley, 1781.

William Hayley, *An essay on painting: in two epistles to Mr. Romney.* The third edition. London, J. Dodsley, 1781.

William Hayley, *Ode, inscribed to John Howard, Esq. F. R. S. author of "The State of English and foreign prisons"*. The third edition. London, J. Dodsley, 1782.

William Hayley, *The triumphs of temper; a poem. In six cantos.* The third edition. London, J. Dodsley, 1782.

William Hayley, *An essay on epic poetry; in five epistles to the Revd. Mr. Mason. With notes.* London, J. Dodsley, 1782.

William Hayley, *Plays of three acts; written for a private theatre.* London, T. Cadell, 1784.

アームストロングは、最初の著作について著者を同定していない。

(名古屋大学名誉教授)